

地域と人の心に彩りを

元教員夫婦海外でも ボランティア活動

広崎地区避難広場前の道沿い、菅野義昭さんが所有するのり面に幅約4メートル、長さ約60メートルの花壇があります。その管理をしているのが一木昭二さん、朱實さん夫婦です。

「益城町に引っ越してきたとき、自宅前ののり面に雑草が生い茂っていました。少しでも町がきれいになるならと思い、菅野さんに相談して花を植えることにしました」

中学校の教員だった二人は、昭二さんの定年退職を機に、海外でのボランティア活動を開始。日本の小・中学校の子どもや保護者たちが廃品回収で集めたお金を預かり、インドやパキスタンで学校に行けない子どもたちにノートや服を買い与えました。フリーカメラマンとしても活動していた昭二さんが、現地での活動を写真に残し帰国後に見せて報告すると、子どもたちは誰かの役に立てたことをとても喜んでいましたそうです。

花と共にある人生 広崎で花を咲かせて16年

一木さんが手掛ける花壇は、花を美しく見せるために全体がデザインされており、四季折々の花が咲き誇ります。これらの花に関する知識は、昭二さんが祖父から受け継いだもの。幼い頃から祖父の花園で手伝いをし、小遣いで種を買い、自分の花壇を作っていたといいます。

「最近では散歩する地域の人々が『きれいに咲いていますね』『毎日手入れご苦労さまです』と声を掛けてくれるようになりました。亡くなった夫に花を手向けたという女性に出会い、その人のためにキクも育てています。見る人の心に花を咲かせ、心の通う会話が生まれる。そのことが私自身に活力を与えてくれます」と昭二さんは笑顔を見せます。

「自分の人生は花と共にある」と話す昭二さんが咲かせる花々は、これからも地域と人々の心を彩り、癒やし続けることでしょう。

下段写真左から／長さ60メートルにわたる花壇(本人提供)／花を楽しむにしている地域の皆さんと／散歩中に花を眺める広崎第二保育園の園児たち

